

初版第三刷追記——「グラスゴーの謎」について

訳者解説内で「グラスゴーの謎」が単行本から除外された理由について不明であると記しましたが、戸川安宣先生のご教示により、その事情が判明いたしました。

パロネス・オルツイが一九四七年に発表した自伝『Links in the Chain of Life』の第十二章に、そのあたりの事情が記述されていました。当該部分を翻訳いたします。

私は六篇からなる探偵小説シリーズの執筆に勤しんでいた。その主人公は紐のきれはしを手にした案山子かかしのような老人で、婦人記者と（A・B・C喫茶店）で事件について語り合うのだ。タイトルは『隅の老人』といった。六篇に対して六十ポンドの原稿料が支払われるという契約は、とてもよかった。しかしそのときすでに心の中では、雑誌に扇情的な小説を書くのは、私自身のためによくないのではないかという葛藤があった。私はそれ以上のことを成し遂げたかったのだ。もっと大きな成果をだ。私の名前を国じゅうに知らしめるような本を書き、それを皆が繰り返し読んで議論をし、さらに私はその意見に傾聴するというようなことだ。（中略）

その年の春、ロンドンに戻った。私は未だに鷹のよう

な大物を狙っていた。しかし一方で、一、二羽の雀を撃ち落とせたのは、よかったと思っていた。そうしたささやかな成果の中で最も重要だったのは（私のブライドはそれらを成功と呼ぶことをよしとはしない）、エヴェレット氏の勧めで『ロイヤル・マガジン』に連載中の「隅の老人」シリーズを継続させられたことだった。しかしそこに一つ変更が加えられた。老いばれ案山子が婦人記者にさまざまな犯罪を解説してみせるのだが、その事件はロンドンではなく、イングランドもしくはスコットランドの主要都市で起きたということにするのだ。彼はさらに、いくつかの都市を舞台にしてはどうかと具体的に提案までしてくれた。グラスゴーもその候補だった。またヨークなどもそうだった。私が行ったことがあり、知っている都市だったらどこでもよかった。

さて、私はこの作品に将来を賭けるほどの馬鹿ではなかった。これら作品の舞台になった都市では、いい宣伝になると太鼓判をおしてくれた。私はやれやれと思いつながら、自分の最高傑作になるであろう作品のノートを、心の奥底の一番大切だけれども今すぐ必要ではないものをしまっている場所に押し込めて、新しい連載作品に気持ちよくとりかかった。

明敏な警察を手だまにとる、謎いっぱいの殺人事件の舞台は、グラスゴーに決めた。私には、グラスゴーは馴染みの場所だった。唯一の問題は、どの通りのどの家で

犯罪が発生するかだけだった。もうすでにアイデアはできていた。検死審問、数人の証人、相反する証拠、警察の捜査……。『ロイヤル・マガジン』の編集者も読者も大喜びして、連載の続きを待ち焦がれるに違いないと思っていた。

ところが、思いもよらないことになった。小説は発表されたのだが……三日もしないうちに、編集者も助手も不運な著者も、山のような投書に埋もれてしまったのだ。何十通、いや何百通という投書が、『ロイヤル・マガジン』が読める場所ならどこでも国じゅう、特にスコットランドから殺到した。怒りの投書、嘲りの投書、怒りというよりも悲しみの投書などいろいろだったが、その内容は同じだった。スコットランドには検死審問の制度はないという指摘だった。著者はそんなことも知らないのか？ そのとおり、知らなかった。知っていたらそんな無知をさらけ出すことはなかった。編集者も助手も、スコットランドに検死審問がないことを知らなかったのか？ 犯罪の初動捜査は検察官が行なうことは？ フランスの予審判事制度によく似た制度だということはないか？ ああ！ 今は知っているけれども、当時は……。私がいかに恥ずかしく思い、絶望したかご想像いただきたい！ どんなに自分を嘲り罵ったことか。私は一生の大作をものする前に、すでに経歴に傷をつけてしまったのだ。今さらやり直しがきくだろうか？ 自分の作品の肝

心要の点を知らない無知で馬鹿な作家の作品を、編集者は見向きもしないのではないだろうか？

私は恥ずかしくてならなかった。いつも優しく理解を示してくれる夫は、傷ついた私の心を慰めてくれた。彼はこう助言してくれた。「一度戦いを始めたのなら突き進むべきだ。やられるまえにやってみよう。『ロイヤル・マガジン』の編集部の人々に、スコットランドの司法制度について君以上の知識があるかどうか訊いてみたまえ。そうすればどうにかなるよ」

そして、何も起こらなかった。私は夫が言うように、手紙を書いた。簡潔だが自分を卑下しすぎない手紙だ。幸いなことに、『ロイヤル・マガジン』編集部のみならず、ユーモアのセンスがあった。検死審問の件は何も知らなかったし、この騒動も笑い飛ばして、二百五十通の投書をゴミ箱に放り捨ててしまった。そして私には、前に依頼した通りに仕事を続けてほしいと言ってくれた。こうしてこの騒動は何ごともなく終わった。しかし私は厳しい教訓を得た。そして、それは私の人生に大いに資した。その後、自分の作品については、きちんと調べずには書かないようにしたからである。

『Links in the Chain of Life』(一九四七) 第十二章より。

二〇一四年三月五日

平山雄一